

ダークツーリズムに垣間見える「紅いイデオロギー」 ——2008年汶川大地震の事例——

Red Ideology to Catch a Glimpse of Dark Tourism:
A Case Study of Wenchuan after the Major Earthquake in 2008

雨森 直也*

要 旨

本研究は、2008年5月12日中国四川省で発生した汶川大地震を利用したダークツーリズムの実践のあり方について考察する。汶川大地震は、共産党政権下の中国で発生したそれまでの大地震と異なり、初めて外国人記者の現地直接取材を認め、初めて外国の救援隊を受け入れたことでも知られている。そのため、世界的にも汶川大地震は記憶に残る大地震であったことに違いない。また、それは中国で初めてダークツーリズムを意識した観光開発であり、その実践のあり方は非常に興味深いものがある。

本研究が調査対象としたのは、大地震によって倒壊した建物が残されている汶川県、ならびに大地震をテーマとした展示を行っている博物館が所在する汶川県ならびに大邑県である。本研究の目的はそれらの大地震の遺物ならびに、大地震をテーマとする博物館がどのように「展示」されているのか、そして、それらの展示が何を意味しているのかを読み解くことにある。

Abstract

This study considers practices of dark tourism during the major earthquake

* 立命館大学大学院文学研究科地理学専修博士後期課程

that struck Wenchuan in Sichuan province, China, May 11, 2008. The Wenchuan earthquake is different from previous major earthquakes that occurred under the watch of the Chinese Communist Party government. For the first time, the Chinese Communist Party government allowed the direct coverage of media in local areas, and received foreign rescue parties. As a result, Wenchuan has come to be known worldwide. Moreover, the Wenchuan earthquake is the first major earthquake that promoted tourism development, and its practice is very interesting. This study considers the practices reflected by tourism development in earthquake-hit area in Wenchuan.

要 旨

この研究は考察 2008 年 5 月 12 日在四川省发生的汶川大地震の黑色旅游の实践。汶川大地震和以前的中共政权下的大地震不一样，大家都认为中共在灾区承认外国记者直接采访、接受外国救援队是第一次。所以汶川大地震在世界上非常有名。首次计划大地震的旅游开发，我们对此很有兴趣。所以这个研究是考察汶川大地震怎样被表现、怎样被实践的。

キーワード：ダークツーリズム、社会主義イデオロギー、大地震、中国

Key words : dark tourism, socialism ideology, major earthquake, China

关键词：黑色旅游，社会主义思想体系，大地震，中国

1. はじめに一研究の背景

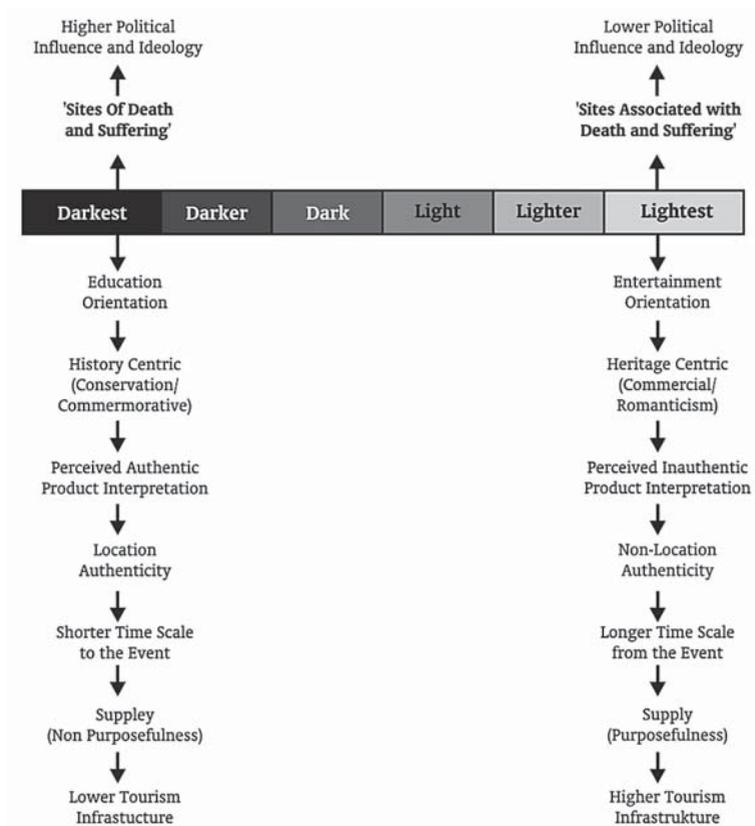
1-1. ダークツーリズム研究

近年、人の死にまつわる場所を対象とした観光は注目を浴びているが、特に新しい観光形態というわけでもない。このような観光形態はこれまでも多様な観光現象の中で、すでに実践されてきた。例えば、第二次世界大戦などの戦争遺物、自然災害など多くの生命が失われたことを伝える景観や遺

物、そして、悲惨なできごとを知識として伝える博物館（記念館や資料館を含む）である。こうした人の死にまつわる場所を観光資源とするツーリズムは近年、ダークツーリズム（dark tourism）と呼ばれるようになってきている。このようなツーリズムの形態は、観光客に対して戦争や自然災害といったものの悲惨さを伝えるとともに、それを利用して知識を広める教育的な価値を持っている。

そうした人の死にまつわる場所を対象とした観光がダークツーリズムとして捉えられるようになったのは、Foley と Lennon の研究を契機とする（Foley and Lennon 1996a, 1996b）。彼らの研究は当初、それほど注目を浴びていたわけではないが、それが広く注目されるようになったのは、「9.11 アメリカ同時多発テロ事件」の後のことではないかと考えられる。

彼らの研究以降、今日まで人の死にまつわる場所を対象とした観光は、ダークツーリズムとして広く議論されているが、明確な定義は定まっていないのが現状と言えるだろう。その大きな要因はダークツーリズムという現象に使われている観光資源が単一の「色」によって成り立っているわけではなく、その濃淡には大きなばらつきがあるからである。Stoneによれば、政治的なイデオロギー、教育的価値やエンターテインメント的価値、発生した時からの時間的間隔などによって、その濃淡が決定されるという（図1）（Stone 2006:151）。つまり、特定の死にまつわる場所であっても、何らかの出来事が発生した直後は人々の記憶が鮮明であり、死への擬似的体験を可能とするが、時間を経れば、それは徐々に不鮮明となり、死への疑似的体験を難しくする。さらに二世代、三世代と時間を経過すれば、大して死への擬似的体験ができない場所へと変化していくだろう。具体的には、第2次大戦の激戦地といった場所は、多くの人が死への強い擬似的体験をできるだろうが、関ヶ原の戦いがあった古戦場では、それ以上にはできないだろう。また、死にまつわる場所となった由縁についても、世界大戦や大地震の場合、それらの悲惨さに思いを馳せることがあっても、王家の墓といった場所では王朝の栄枯



(出典 : Stone 2006:151)

図 1 ダークツーリズムの濃淡

盛衰を感じ取ることはできても、死への擬似的体験や悲惨さはそれほど感じられないだろう。結局のところ、このような濃淡の異なるダークツーリズムを一概に語ることは、大変難しいと言えるだろう。

ダークツーリズムに関する研究は、まだその途に就いたばかりであり、今後、多くの研究成果が期待される。そこで、本研究では2008年に発生した中国における四川・汶川大地震^{ウエンチョアン}を利用したダークツーリズムを事例として、その実践のあり方をどのように解釈すべきかを考えていきたい。

1-2. 中国の紅色旅游とダークツーリズム

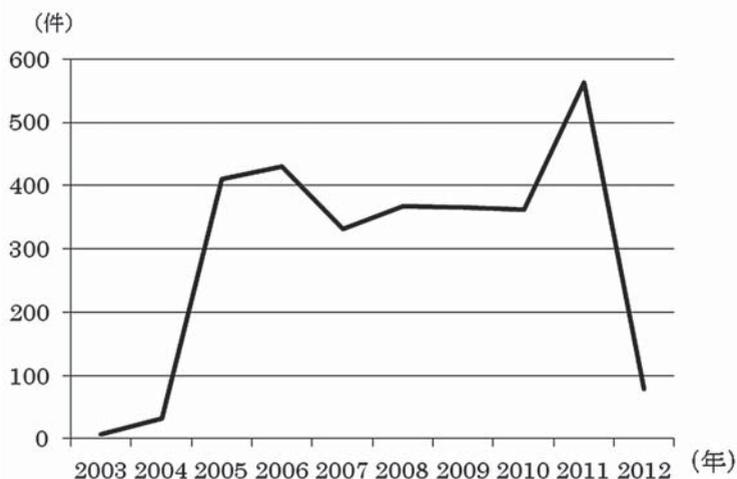
中国ではダークツーリズムは「黒色旅游¹⁾」と呼ばれている。中国のダークツーリズムは晏ほかなどが指摘するように、しばしば日中戦争やその当時の中国共産党の活躍を観光資源とする紅色旅游と関連づけられてきた（晏ほか2008、于2009、何2012）。

中国の観光が実質、始まったとされる1980年代以降、毛沢東の生家などといったごく一部の観光地を除いて、中華民国期の共産党関連の遺物を見学するといった意識は一般の民衆にほとんどなかった。その変化のきっかけとなったのは、中国政府が2004年に『2004-2010年全国紅色旅游發展計画綱要』を発表し、紅色旅游を前面にした観光を打ち出したことにある。

『2004-2010年全国紅色旅游發展計画綱要』によれば、紅色旅游とは「おもに中国共産党における指導のもと、人民が革命と戦争の時期、偉大な功績を打ち建てた記念地、シンボリックな事を媒体とし、（中略）参観と遊覧をメインテーマとする観光活動である」と定義されている。つまり、紅色旅游は中国共産革命にまつわる遺物を見て回る観光なのである。この背景には、2003年のSARSによって打撃を受けた観光業に対し、中国国内の観光客の需要を掘り起こして、中国の観光産業をテコ入れする側面があったことは否めない。

それによって、共産党と関係する多くの観光地が再注目され、全国で一種のブームのようになった。しかし、紅色旅游は当初、愛国心教育といった枠組みの中で「公費観光」が認められていたため、公費の支出が大きくなり、中国のマスコミによって大きく批判されるようになった。その後、2006年1月に中国共産党は紅色旅游における公費支出の禁止を通達するにいった²⁾。それにともなって、紅色旅游に関する研究も下火となった（図2）。

他方、中国におけるダークツーリズムに関する研究は、2006年からみられるようになり、2012年3月末までに少なくとも54本の論文を数えるに至っている（表1）。それらの内容は多岐にわたっているが、汶川大地震のあった



(2012年3月末時点、筆者作成)

図2 中国国内の紅色旅游に関する論文数の推移

表1 中国におけるダークツーリズム関連の研究論文の動向 (件数)

テーマ 発表年	四川大地震の事例	他地域の事例	レビュー	紅色旅游との関連	地元住民の感情	観光動機 (教育・倫理)	開発	その他	合計
2006			1						1
2007							2		2
2008	2			1		1	1		5
2009	9	5	2	1		2	2	1	22
2010	2	3	1		1		3		10
2011		3	1		2	2	3	1	12
2012				1			1		2
合計	13	11	5	3	3	5	12	2	54

(2012年3月末時点、筆者作成)

2008年を境に、いいかえればそれを契機として、ダークツーリズムに関する研究が増加するようになったと考えられる。

1-3. 研究の意義と目的

大地震を観光資源としたダークツーリズムは、Stone の言葉を借用するならば、「濃いダーク」の性質をもっていると言えよう。しかし、その利用方法は個々の国家における政治的、社会的な背景によって多様な展示やその内容で実践が行われていよう。中国は社会主義のイデオロギーにもとづいた中国共産党による独裁政権の下にあり、その観光利用は、政治的影響を大きく受けやすい。そのため、本研究には中国の政治・社会的な理解にもとづいたアプローチが必要である。

JNTO によれば、中国は 2010 年現在、外国人訪問客数において世界第 3 位であり、最も多くの国際観光客が訪問する観光大国の 1 つである。中国国内の観光もまた、経済成長にともない大きく発展しており、従来の自然や歴史遺産などの観光だけではなく、紅色旅游などといった新たな観光も出現するようになった。そうした観光の発展において、汶川大地震を利用した観光は中国において実質的に初めてのダークツーリズムの実践例であり、今後の中国観光を考える上で重要な意義を持っている。

本研究の目的は、汶川大地震を利用したダークツーリズムがどのように実践されているのかについて、震源に最も近い町やその周辺に「展示」されている地震遺物や現地の博物館の調査結果をもとに考察を加えることにある。こうした考察を通じて、本研究は中国におけるダークツーリズムの実践が何を企図としたものであるのかを明らかにする。

2. 四川汶川大地震と四川省の地震を利用した観光政策

2-1. 四川省と震源地周辺地域の概観

四川省の人口はおよそ 8,000 万人であり、人口の上で中国の省レベルの行政単位では第 4 位にあたる（国務院人口普查弁公室・国家統計局 2012）。成都市は省都であるとともに西南中国の中心都市の 1 つでもある。四川省東側



図3 地域概観図

の四川盆地に省人口が集中している一方で、同省西南の少数民族が集住する
カンゼチベット 甘孜藏族自治州、アバ 阿壩藏族羌族自治州、チヤン 凉山彝族自治州の大部分は山地
リヤンシャンイ であり、人口密度が低い。省全体からみた少数民族の人口の割合は数%に過
 ぎず、漢族に比べて経済的に貧困である³⁾。

次に、本研究において関心が払われるツーリズムの観点から対象地域の特
 徴について概観すると以下のものである。四川省の主な観光地は都江堰、
ドゥジャエン 樂山、ルージュアン 峨眉山などが有名であり、本研究の調査地には都江堰、
ジウジャイゴウ 九寨溝や黄龍
ファンロン などと近接している。また、四川省にはパンダが多く生息しており、その
 観覧を当てて来る観光客も少なくない。2011年の国内の観光客は延べ3.5
 億人であり、同年の国際観光客は延べ164万人を数えた（四川省旅游局ホーム
 ページ）。

震源地となった汶川県は阿壩藏族羌族自治州に属しており、チャン族やチベット族の人口も多い。汶川県政府ホームページによれば、震災前の人口は105,436人、そのうち農業人口が67,438人、羌族の人口が少数民族では最も多く、36,705人である。汶川県は四川盆地の北西辺の山地に位置し、県の面積は8,820km²である（汶川県政府ホームページ）。震災以前、汶川県は観光地にあまり恵まれず、先ほども述べた世界自然遺産である九寨溝・黄龍や都江堰の通過点に過ぎなかった。

2-2. 四川・汶川大地震とその後のダークツーリズムによる観光開発

汶川大地震は、2008年5月12日に発生したM8.0の地震である。地震の原因は四川盆地の北側から西側にかけて走る龍門山断層によるものである。死者・行方不明者は10万人にもおよび、極めて被害が大きい地震であったと言えるだろう。

この地震がそれまでの中国における地震と大きく異なった点は、中国政府が新華社といった一部の国営メディアだけに認めていた震災の取材を、外国人の記者に対しても認めた点にある。これによって中国当局によって都合の良い情報だけを配信する傾向にあった地震報道が、外国人記者による直接の取材を経た情報も世界に配信されることになった。さらに中国政府は世界からの救援活動も初めて受け入れた⁴⁾。この遠因となったのは同年8月に北京オリンピックを控えており、オープンな中国をアピールしたい共産党指導部の意向が強く働いたものとみられる。しかし、海外の記者による取材の多くは、成都市を中心とした漢族地区のものにとどまり、少数民族地区の取材はあまりなされてなかったうえ、報道された映像は依然として中国の国営テレビ局の配信したものに留まっていたことも事実である。

しかし、被災直後、我々は悲惨な被害を目の当たりにするばかりであったが、徐々に被害の実態が明らかになるにつれて、中学校などの倒壊した建築物の手抜き工事や震災復旧がらみの汚職などが海外で報道され始めたため、

四川省政府は徐々に海外の記者による報道を規制するようになった⁵⁾。

そうした状況下で汶川大地震を利用したダークツーリズムによる観光開発が、四川省社会科学院の研究員の王新氏によって提案され、省内で賛否を交えた議論の末に採択されるに至った(新華網ホームページ)。つまり汶川大地震は、中国にとってダークツーリズムにもとづいた初めての観光開発の試みとなった。その詳しい観光開発の経緯や計画をめぐる批判的検討は、別稿で改めて報告することとし、本研究では、震源地であった阿壩チベット族チャン族自治州汶川県の大地震を利用したダークツーリズムの現状ならびに、成都市郊外の大邑県の安仁鎮にある博物館のテーマパークである「建川博物館集落」における汶川大地震をテーマとした博物館の展示について報告し、それらがどのような意味を持っているのか、考察を加えたい。

3. 汶川大地震におけるダークツーリズムの実践

3-1. 汶川県内岷江沿いにおける汶川大地震に関わる野外遺物

汶川県で大地震を利用した観光の一例は、汶川県映秀鎮から汶川県の県政府所在地までの国道213号・317号線の重複区間(以下、213号線)で見ることができる。そこは成都から世界遺産である九寨溝に陸路で向かう際に必ず通るルートである。213号線は岷江沿いの深い溪谷をぬうように伸びているが、地震発生にともなう斜面の崩落と落石によって、橋梁の崩壊や道路の寸断といった甚大な被害を受けた。地震後、ただちに救援物資や人的な輸送のために突貫工事で道路が修復された。しかし、一部の場所では、2012年春に筆者が訪れた時点で、被災場所に看板が建てられており、被災時の状況をそのまま遺すことで地震の悲惨さを伝える演出なされていた。

写真1は、現在の213号線から地震前まで使われていた213号線を映したものである。旧213号線沿いの多くの箇所が、写真1のように地震の際に崩壊した山の土砂によって埋まってしまったという。土砂に押しつぶされた車



写真1 汶川県内の213号線からみた地震の爪痕を示す案内表示
(2012年3月筆者撮影)

が多い中、写真1の中央右の車は、2008年の地震の際に押し流された土砂によって、道路際で止まったままの状態である。今でもこの土砂の中には多くの被災者が眠っているとされている。また、崩壊した橋梁が案内表示とともに地震発生から4年経過した現在でも「展示」されている（写真2）。

このような地震の被災状況を当時のまま展示することは、それまでの中国には全く見られなかった。今回の調査の中で目の当たりにした汶川大地震の遺物の中で、写真1・2の光景は、大地震の悲惨さを率直に伝えるものであった。その一方で、岷江沿いには213号線と並行するように高速道路が建設されつつあり、地震の爪痕は高速道路と重複する場所から徐々に消えつつあり、必ずしも213号線沿いの地震遺物の「展示」が将来にわたって保存されるか否かはわからない。



写真2 今でも残る崩壊した橋梁—汶川県内にて (2012年3月筆者撮影)

3-2. 汶川県映秀鎮

汶川県映秀鎮は震源の真上に位置していたため甚大な被害を経験した場所である。映秀鎮の中心部はほとんど壊滅状態となり、多数の死傷者を出した。地元のガイドによれば、映秀鎮は震災前まで小さな町で、そこに住む人々は近くのダムやコンクリート工場で働く人々が多く、観光とは無縁であったという。しかし、震災後は工場の転出などで職を失う住民が多数出たばかりではなく、政府が居住困難と判断したいくつかの村落の住民が映秀鎮の町に移住してきたため人口が増え、失業問題は深刻さを増したという。住民の中には地震によって体に障害を抱えた家族がいる家庭も多く、彼らを介護し養うのは大変だという。

現在の映秀鎮では、^{シュエンコウ}漩口中学だけが当時の悲惨さを伝えている (写真3)。その他の建物はすべて震災後の新しい建築物である。崩壊した漩口中学が手抜き工事で建てられたというのは震災直後から住民の間で広まっていたと



写真3 崩壊した漩口中学を利用した観光施設（2012年3月筆者撮影）

いうが、今日でもそれに対する政府の補償は十分ではなく、ほとんどの住民が地方政府による圧力により、政府に対して法的手段に訴えることができないでいる。ちなみに、今でも漩口中学の下には行方不明の生徒や教職員の遺体が残っているという。

また、地元ガイドの話よれば、崩壊した漩口中学を利用した施設がオープンした2010年には100万人程度の観光客が訪れ、ガイドやレストランを含めて経済的にはかなり成功した。しかし、2012年には観光客が20数万人程度まで減り、その多くは九寨溝や他の観光地に向かう途中に立ち寄るだけの観光客であり、現地のガイドも雇わず、レストランにも立ち寄らず、宿泊もしない人々であったという。特に団体観光客はそうした傾向が強く、全く利益にならないという。そのため、2012年現在、映秀鎮では被災した漩口中学の周りを塙で囲む工事が行われ、漩口中学の見学に際して入場料を新しく徴収する計画があるという。

映秀鎮の人々の多くは現在、ダークツーリズムの経済的効果に疑問を持っている。その理由は、映秀鎮から30km西に水磨鎮という町があり、そこでも映秀鎮と同程度の地震被害を受けたが、復興対策としてダークツーリズムを一切行わず、一般的な郷村観光⁶⁾を打ち出すことにより、現在では映秀鎮よりも多くの観光客を集め、民間の宿泊施設なども繁盛しているためである。

3-3. 汶川博物館

汶川県の県城に所在する汶川博物館の建物近くに立てられている石板によれば、同博物館は震災後の2009年に建設が着工され、2010年3月に完成した。これは対口援助⁷⁾として広東省の広州市が建てたものであるという。博物館は4階建てであり、筆者が訪れた際は1階から3階までを一般開放していた。ツーリストセンターのある1階には、汶川大地震の状況を伝えるパ



写真4 3階の展示の様子 (2012年3月筆者撮影)

ネル展が行われており、1階の一部分と2階では、汶川県の歴史と民族文化などが紹介されており、ごく一般的な博物館と同様の展示が行われていた。3階では汶川大地震の復興の様子を伝えるパネル展示が行われていた。

3階で目を引いたのは、汶川県の対口援助が広東省によって行われ、その援助によって汶川県が復興したことを示す写真パネルや説明文が数多く展示されていた点にある。展示名を例とすれば、「打ち立てる路—汶川県被災後復興成果展（崛起之路—汶川県災後重建成果展）」とあり、復興への取組みを強く印象付けるものとなっている。ここでは共産党中央の指導者ではなく、広東省の幹部の貢献や復興にいたるまでのグランドデザインに要した会議の様子などを積極的に紹介する内容となっていた。

3-4. 建川博物館集落の2か所の博物館

建川博物館集落は、成都市の郊外の安仁鎮にある。安仁鎮は古い街並みが残っており、その場所に新たに古い街並みを再現した場所を付け加えることで、ノスタルジーを感じさせ観光客を集めている。その街のはずれには、当時この地方で地主として勢力を誇っていた劉氏の邸宅や庭園が残っており、安仁鎮の古い街並みとともに多くの観光客が訪れている。こうした観光地から少し離れた場所に建川博物館集落がある。敷地面積は500畝(1畝≒0.67a)であり、その中の施設は多くの博物館と広場、そして売店、レストランから成っている。

同博物館集落は軍人や政府職員、副市長などを経たのちに民間に転じ、不動産開発会社の経営などにたずさわってきた樊建川という人物によって運営されている（生活週刊ホームページ）。この博物館集落に年間どの程度の観光客が訪問しているのかは不明であるが、筆者が訪れた時は春節休暇を終えており、観光シーズンではなかったが、多くの観光客が訪問していた。

この博物館集落は11か所の博物館と3か所の広場から構成されている。これらの博物館は主に4つのテーマにもとづいている。すなわち、抗日戦争



写真5 建川博物館集落のツーリストセンター (2012年2月筆者撮影)

(日中戦争)、毛沢東時代、汶川大地震、そして民俗風習をテーマとしたものである。メインのテーマは抗日戦争であり、それをテーマとする博物館は5か所あり、紅色時代や四川大地震、民俗風習を扱ったものがそれぞれ2か所となっている。

本研究で関心が払われる四川大地震をテーマとした博物館は2か所である。まず、「5.12 抗震救災記念館」(写真6)は事実上、無料となっており、ツーリストセンターや記念館の正面横のチケット売り場で身分証やパスポートなどを提示すれば、入場券をもらうことができる。

正面入り口から入ってすぐの場所に地震の発生と規模を示す展示パネルはあったが、およそ5分程度の展示内容にすぎなかった。その後、まもなく写真7のように胡錦濤などの震災当時の党中央幹部の写真が飾られ、党や政府、中央軍事委員会による汶川大地震における被災者の救援の様子が延々と展示されていた。館内の多くの展示品は写真パネルであるが、共産党中央の



写真6 抗震救灾纪念馆の全景 (2012年2月筆者撮影)



写真7 胡锦涛のパネル (2012年2月筆者撮影)

幹部による視察や救援を誇示するパネルに続いて、四川省の幹部のパネルが続々と展示されていた。その後、人民解放軍や武装警察、警察、消防といった機関による救援活動の紹介が続く。そして、村に在住する基層の共産党員の救助や活躍シーン、教員や子どもたちの笑顔を映し出したパネルへと進んでいく。さらに順路を進むと終盤に近づき、ようやく各国や華僑などによる援助も紹介されている。その後、中国共産党が行った災害復興に対する金額や物資の内容、再建した道路や学校の数といったものが事細かに説明されている。そして、同記念館の最後には写真9のように地震への勝利を印象付ける大画面にたどりつく、といった行程となっていた。

以上のことから明らかなように、この博物館の展示の中心となっているストーリーは、地震の発生に際し、いかに共産党中央幹部の指揮のもと人民解放軍、武装警察、警察などによる救援活動が積極的に行われ、その取り組み



写真8 「勝利は英雄の中国人民のものである」と書かれた大画面
(2012年2月筆者撮影)

が基層黨員まで行き渡ったことによって、多くの住民が救われた。そして、最終的に中国人民は大地震に打ち勝った、というシナリオ構成になっている。民間の経営者がこの博物館集落を運営しているとはいえ、中国政府に批判的な言論は全く見られず、この展示に際して共産党宣伝部などの当局の内諾が事前にあったことは想像に難くない。つまり展示の意図は、大地震を上記のストーリーによって再構成し、参観者の愛国心を強く湧き立てることにあることが明白であると言わざるをえない。

次に、同じ博物館集落にある「汶川大地震博物館」について述べていく。同博物館は有料の施設であり、入場料は1人あたり20元（1元≒15円、2013年2月現在）である。「汶川大地震博物館」は「5.12抗震救災記念館」に比べて、写真パネルだけではなく、被災地で収集された品が多く展示されている。例えば、地震の際に使われた救助道具、救援物資、移築された被災した部屋であった。

また、写真9に見られるように「汶川大地震博物館」では、館内を順路にそって観覧していくと、たびたび共産党や人民解放軍などを中心に各方面からの救援に対して感謝を表すような展示が各所みられた。その一方で、大地震の甚大な被害を多くの写真パネルや収集品などで演出しており、根本的に展示内容は「5.12 抗震救災記念館」とほとんど異なるものではなかった。

「建川博物館集落」における地震をテーマとした2つの博物館の展示に共通しているのは、大地震による被害の悲惨さを伝えると同時に共産党の救援活動を積極的に「展示」し、共産党の統治に対する感謝の念を抱かせる仕掛けがなされているという点にある。それは共産党を賛美するだけであり、地震の際に噴出した「おから建築」をめぐる問題、学校で被災した子どもたちに対する国家賠償の問題、汚職の問題などの多くの問題に全く言及していない点が、現在の中国共産党の独裁体制の限界と言えらるう。



写真9 救援に使われた道具や感謝の垂れ幕をかざる一角

(2012年2月筆者撮影)

4. おわりに

本研究では汶川県や大邑県の調査結果をもとに、汶川大地震にかかわるダークツーリズムの現状について考察した。今回明らかにされた点は以下のとおりである。

汶川大地震を契機としたダークツーリズムの実践の現場は、主に被害を伝える場所、そして震災を通じて観光客を教育する場所の2つの場所に分けられた。被害を伝える場所では、汶川県を中心に野外に「展示」されていた汶川大地震の遺物は、観光客の地震による被害の悲惨さをまざまざと見せつけていたと言えるだろう。特に213号線沿いの遺物（地震によって発生した土砂崩れ、それにとまって地中に埋まった国道、破壊された橋梁）は、大地震に対する人類の非力さや無力感をかきたたせるダークツーリズムの役割

を果たしている。その一方で、映秀鎮の漩口中学は、地震によって基礎の部分から垂直に崩れ落ちたところを見ると、手抜き工事を想像させなくもないが、観光地となっている漩口中学のどこを見ても、それを物語る掲示を一切見つけることはできなかった。ガイドは枕詞のように共産党への感謝を述べる説明から始めていることから推察して、大地震における本当の問題を観光客に伝えることは決して容易ではないのだろう。

そして、震災を通じて観光客を教育する場所であるべき博物館は、救援や復興の様子を自賛していたにすぎず、共産党指導部を中心とした手厚い援助によって人々が救出される様子を描き出すことを企図していた。そういった施設は本来、死にまつわる遺物（レプリカや写真パネルを含め）を展示し、震災の甚大さ、悲惨さを訪問者に説明する教育的価値を担うべきにもかかわらず、今回調査した四川省の施設は、中国人来訪者に対する愛国心の高揚に利用され、共産党統治の正当性、その偉大な慈悲深さの喧伝に利用されていた。

上記の事例が示すダークツーリズムの特徴は、「死にまつわる」という点を利用して観光客の興味を誘い、震災の惨状を目の当たりにしたいという好奇心を満たす観光形態の1つにすぎないものとなっていた。つまり、213号線沿いや漩口中学の遺物は人々の心に被害の実態を深く刻み込み、震災に対する興味を抱かせるものではあった。それと同時に、博物館では愛国心教育を行うという政府や博物館の設置者のねらいを明確に読み取ることができた。ようするに、大地震を利用したダークツーリズムは、紅色旅游の定義にあった「革命と戦争の時期」という時代的な定義を除けば、決して紅色旅游と変わりが無いといえるだろう。中国では紅色旅游やダークツーリズムは、興味の抱かせ方が異なるだけで、その目的は愛国心教育であった。

今後は同じ中華圏にありながら、民主化を果たした台湾の事例と比較しながら、大地震によるダークツーリズムの利用のあり方について考えていきたい。

注

- 1) 台湾では「暗黒旅游」と呼ばれており、中国語全体でコンセンサスができていないわけではないうのである。本稿では中国を事例としているため、「黒色旅游」(またはダークツーリズム)と記述する。
- 2) http://archive.wenming.cn/hsly/2006-01/12/content_14295554.htm (2013年2月19日閲覧)によれば、2006年1月に国家発展と改革委員会や共産党宣伝部など13の機関が共同で、公費旅游による紅色旅游の禁止を通達したということである。
- 3) 甘孜や阿壩の自治州では、チベット族の自殺に関するニュースが、たびたび報道されており、経済的な問題だけではなく、政治的にも大きな問題を抱え、潜在的に不安定な地域でもある。
- 4) 日本からの救援隊による活動地域は、同省北部で漢族が主に居住する青川県であり、医療救援隊の活動の場合は成都市に限られていた。
- 5) 47ニュース(全国新聞ネット)ホームページによる「外国人記者の人数制限 中国、マイナス報道懸念か(2008年6月9日)」
<http://www.47news.jp/CN/200806/CN2008060901000015.html> (2013年2月19日閲覧)の記事によれば、四川大地震の外国人記者の取材を制限したと報道している。同記事ではその原因を外国人記者による中国当局の不正を暴かれたくないためと見ている。
- 6) 郷村観光とは、村落に訪れた観光客に対して、特産品などの土産物を買ったり、中国では「農家楽」と呼ばれることが多い民宿を提供する観光である。
- 7) 対口援助とは「先富論」にもとづき、早く発展した沿海部の省級行政区が担当する特定の内陸部の省級行政区を財政的にも人材的にも援助するシステムである。平時のみならず、大きな災害時にも中央の指示のもとで動員され、沿海部の省が災害地区の復興を競って行う。例えば、四川大地震では汶川県を援助したのは広東省であり、汶川県以下の各郷鎮には広東省の地区級行政区がそれぞれ対口援助を行った。

参考文献

- 晏蘭萍・洪文文・方百寿(2008)「“紅色旅游”与“黒色旅游”比較探討」『井岡山学院学報(哲学社会科学)』29-5: 109-112.
- 國務院人口普查弁公室・國家統計局編(2012)『中国2010年人口普查資料(上・中・下)』中国統計出版社.
- 何景明(2012)「“紅与黒”: 論精神旅游産品的開發向度」『旅游学刊』27-2: 88-93.
- 于儒琳(2009)「是否推出黒色旅游—更重要的是思想教育問題」『産経透視』2009-10: 79-80.
- Foley, M. and Lennon, J. J. (1996a) 'Editorial: Heart of Darkness', *International Journal of Heritage Studies* 2(4): pp.195-197.
- (1996b) 'JFK and Dark tourism: A fascination with Assassination', *International*

*Journal of Heritage Studies*2(4) : pp.198-211.

Stone, P. R. (2006) 'A Dark Tourism Spectrum: Towards a typology of Death and Macabre Related Tourist Sites, Attractions and Exhibitions', *Tourism: An Interdisciplinary International Journal* 54(2) : pp.145-160.

インターネット

47 ニュース（全国新聞ネット）ホームページ：「外国人記者の人数制限 中国、マイナス報道懸念か」<http://www.47news.jp/CN/200806/CN2008060901000015.html>（2013年2月19日閲覧）

日本政府観光局（JNTO）ホームページ：「世界各国・地域への外国人訪問客数（2010年）」http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism_data/global_tourism_trends.html（2011年9月10日閲覧）

中国文明網ホームページ：「“紅色旅游”必須自費」http://archive.wenming.cn/hslly/2006-01/12/content_14295554.htm（2013年2月19日閲覧）

生活週刊ホームページ：「樊建川：一個人和30座博物館」<http://www.why.com.cn/epublish/node32682/node32804/userobject7ai248544.htm>（2013年3月25日閲覧）

四川省旅游局ホームページ：「2011年四川省旅游業統計公報」<http://www.scta.gov.cn/sclyj/lytj/tjfx/system/2012/05/31/000205838.html>（2013年1月30日閲覧）

汶川县政府ホームページ：「汶川簡介」<http://www.wenchuan.gov.cn/p/1/>（2013年4月20日閲覧）

新華網ホームページ：「“黑色旅游”：保障安全 尽快開放地震遺跡旅游」http://www.sc.xinhuanet.com/content/2008-07/06/content_13736142.htm（2013年2月19日閲覧）

